

音楽における“創作”を視野に入れたリズム表現Ⅱ

～リトミック教育法を活用して Vol.3～

松田 孝可子

(京都府立宇治支援学校)

KEY WORDS: 特別支援学校高等部 音楽 リトミック教育法

(目的)

A 府立 B 支援学校は、2011 年に新設された知的障害・肢体不自由特別支援学校であり、学年制を導入している。

筆者は、201X 年度、高等部くらし地域コース第 2 学年に配属された。201X-1 年度、同学部・コース第 1 学年を担当していたことから、筆者の専門教科である音楽を継続して指導する好機に恵まれた。そこで、高等学校学習指導要領解説芸術(音楽)編における音楽Ⅰ、「表現領域全体を通じて創造的な表現力を高める」ことに引き続き、音楽Ⅱ、「個性を生かした創造的な活動を行い、音楽の表現力を一層高める」ことについて、「表現力等の基盤となる言語に関する能力を育成すること」を重点に進めることとした。

本研究では、リズムと“ことば”による創造的な表現方法について継続して追究する。リトミック教育法における、ビートに合わせたリズム打ちや言葉にあてはめたリズム表現が、言葉の持つリズム感を大切に生徒の表現・表出にどのように生かせるのかを、音楽の授業展開の中で分析する。

(方法)

音楽の授業は週に 1 回、約 80 分間の時間枠として、学年の生徒全員が履修するように設定されている。

・対象：高等部くらし地域コース第 2 学年 20 名

・期間：201X 年 4 月 19 日(初回)

～201X+1 年 3 月 7 日(最終回) 全 23 回

中心指導者(筆者)の他に学年の指導者 4 名が音楽を担当する。学年の指導者は音楽を専門教科としているわけではなく、リトミック教育法についても未修得である。授業の中では生徒と一緒に活動し、必要に応じて、個々に言葉や身体のサポート等をする役割となる。

・授業展開：

①はじまりの音楽・挨拶 ②創作 言葉リズム ③創作 身体リズム ④歌唱 ⑤器楽 ⑥鑑賞 ⑦おわりの音楽・挨拶

毎時間一定の流れにより授業を展開し、定着を図っている。ここでは継続して②について取り上げることとする。

(結果)

一学期は、キーボードのモデルリズムより、明確な 4 拍子を提示した。隊形については、一年間車座の設定にて流れを定着させることとした。前年度の学習の基盤があり、キーボードがリズムを刻み始めると、自然に手拍子を打ち鳴らしたり、身体の一部を揺らしてリズムを感じたりする生徒が数名現れた。また、車座の隊形が功を奏し、お互いに見合っただけをする等の手立てとなった。テーマは、時季的なものや、学校生活等に絡めたものを、中心指導者が設定し、リズムに合わせて表現することで手本提示とした。また、隣の生徒へ合図を送ると、自分の順番がわかり、次からは、生徒同士で繋いでいく流れができた。繋がりが難しそうな場合は指導者が間に入って繋ぎとした。

二学期は、流れが定着してきた頃合いを見計らって、キーボードのモデルリズムを、少し複雑なものへと移行して取り組んだ。リズムを刻む音の高低の変化を感じて、手拍子や足拍子を取り交えて高低の違いを表現しようと工夫する生徒が数名現れ、それらをお互いに模倣し合う等して、リズムに対する動きが多様化した。テーマに応じた言葉での表現を加えると、時に動きが止まってしまうことも見られたが、発言を終えると、友だちの様子を見たり、隣同士で声を掛け合っ

たりして、また思い出したかのようにリズムを打ち鳴らすことができる場面もあった。この頃、順不同にし、自分の発言を終えた後、隣以外の友だちに合図を送る試みをした。最後の方に順番が回ってくると、まだ発言していない人は誰かと尋ねる等して、合図を丁寧に送ることができた。

三学期は、さらに難易度を上げ、キーボードのモデルリズムより、明確な 3 拍子を提示した。まず、4 拍子との違いを感じ取れることを目指し、授業展開の③創作 身体リズムや⑥鑑賞においても 3 拍子の特徴を生かした楽曲を取り上げた。初回は、4 拍子との違いに戸惑う姿が見られ、中心指導者が 3 拍子の強拍の箇所を手や足の動き等で大きく表現して見せ模倣を促しても、2 拍子となったり、ただビートを打ち鳴らすのみとなったりしてしまっていたが、回を重ねるに連れて、3 拍子のリズムに段々と馴染む様子が窺われ、隣の友だちに教えたり、一緒に手拍子をしたりして共通のリズムを見出すことができてきた。言葉のリズムを 3 拍子に乗せることは数名を除いて難しかったが、4 拍子との何らかの違いを身体で感じて表現しようとする姿勢は見受けられた。

(考察)

一学期は、ビートの基盤を固め、前年度の学習の復習として、共通のリズムの中で流れを定着させることに重きを置いた。リズムを聴いてすぐに手拍子等が打ち鳴らせたことから、生徒の即時反応を導き、一定の学習成果を得ることができたと推察される。また、テーマとして、時季的なものや、学校生活等に絡めたものを設定したことにより、風景をイメージしたり、他の授業との関係が深まったりして、“ことば”の想起を促すことができたと考えられる。

二学期は、リズムを複雑にすることで、音の高低を感じ取ることができ、創作の幅が広がったと考えられる。手拍子や足拍子等の身体の動きを音の高低にて変化させることは、③創作 身体リズムへも影響を及ぼしたと想定される。加えて、順不同で実施したことにより、何を言おうかと積極的に思考し、友だちの発言を聴いて思い出したり参考にしたしたりする等、表現することに対する工夫や、創作意欲に繋がったと考えられる。合図を送って発言を待っている間、リズムを滞りなく打ち鳴らしていくことで、共通のリズムを介した繋がりを少なからず感じ取ることができたのではないかと想像する。

三学期は、まず 3 拍子を受け入れようという、リズム習得に対する意識が向上したと推察される。新しい拍子感を得ることで、今後の創作活動への可能性が高まったと考えている。

(結論)

リトミック教育法では、年齢に応じた教材が設定されている。様々なリズムという素材をとおして、人と繋がったり共感したりすることで、個々の創造力や感性を育て、自己表現力を豊かにすることが注目されている。

一人一人の創造的な表現力を高める際の手立てとして、リトミック教育法を活用し、今後の学習において、多様なリズム感が、創作活動や創造的な表現活動へ生かせることを期待している。

(文献)

・エミール・ジャック＝ダルクローズ(2003)『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社

・松田孝可子(2016)「音楽における“創作”を視野に入れたリズム表現」日本特殊教育学会第 54 回大会 P3-30 他

(MATSUDA Takako)